

岡 稔

『資本主義分析の理論的諸問題』

『社会主義経済論の新展開』

新評論 1975.6 227 ページ, 256 ページ

すぐれたマルクス主義経済学者岡稔氏が49歳の若さで亡くなって、はやくも3年の歳月が流れようとしている。岡氏の死去によってわが国の社会主義経済(学)研究の分野に容易に埋めえない大きな穴があいてしまった、という私の3年前の実感は、いまもなお続いている。社会主義経済(学)研究の後輩として岡氏の精力的な仕事からつねに新鮮な刺激をうけてきた私は、このたび岡氏の「論文集」上・下巻を手にして、岡氏がいかに傑出した研究者であったか、われわれはいかに惜しい人を失ったか、を痛感するのである。

昨年6月末に出版された岡稔『資本主義分析の理論的諸問題』・『社会主義経済論の新展開』の2つの著作(「岡稔論文集」上・下巻)は、岡氏の没後、関恒義氏を代表とする6人の同僚・後輩が編んだものである。周知のように岡氏の業績は量的にも歴大である。著書としては『ソヴェト工業生産の分析』(1956年)、『計画経済論序説』(1963年)、『社会主義経済論』(1968年、竹浪祥一郎・山内一男氏と共著)があり、訳書は8点、論文は80数点もある(これらについては上巻末尾の「著作目録」にくわしい)。今回の2つの著作は、岡氏の多数の既発表論文のなかからえらびだされた21篇の論文を体系的に収めたものである。

『資本主義分析の理論的諸問題』(=上巻)には、再生産と恐慌にかんする3つの論文、窮乏化法則をめぐっての3つの論文、および現代資本主義と窮乏化を扱った2つの論文が収められている。岡氏の本来の研究領域は社会主義経済論(とくにソ連経済論)であったが、1950年代の若き岡氏には、再生産・恐慌論と窮乏化論の2つのテーマに限定されているが、資本主義経済の基礎理論にかかわるすぐれた業績がある。本書はそのほとんどをあつめたものである。これらの論文は発表当時それぞれ学界で注目されたものであり、現在もなお価値を失っていない。巻末の本間要一郎氏の「解説」は、本書の意義を簡潔に論じている。

『社会主義経済論の新展開』(=下巻)は、生前の岡氏

が『計画経済論序説』につづく新しい単独著作として予定していたといわれる「社会主義経済論」あるいは「社会主義経済の基本問題」の構想にしたがって、きっとその素材となったであろう13篇の論文を収めている。すべて岡氏の「晩年」の諸論文である(この点は、巻末の宮鍋熾氏の「解説」にくわしい)。社会主義的所有にかんする2つの論文、労働に応じた分配にかんする4つの論文、計画と市場にかんする3つの論文、経済改革にかんする4つの論文が、体系的に収められている。なお「岡稔君を悼む」という竹浪祥一郎氏の追悼文は、生前の岡氏の人柄と学風を適確に伝えて、われわれの胸をうつ。岡氏自身の手によって新しい著作が完成されなかったことはかえすがえすも残念であるが、読者は、この『社会主義経済論の新展開』によって、岡氏社会主義経済論の精髓をあらためて確めることができる。

『資本主義分析の理論的諸問題』の第1論文「再生産論をめぐる論争史」は、「表式の『証明』能力の過信と均衡の過重視と資本主義的蓄積の流通主義的把握」という一連の誤謬をあきらかにしており、第2論文「再生産表式の一考察」は、抽象的実現理論の意義と限界を説いている。ともに、再生産表式論の抽象的性格を適確に論じたものといえよう。第3論文「恐慌理論の問題点」は、恐慌の本質、原因および発現メカニズムについて、きわめて明快に論点を整理し爾後の研究方向を示唆している。これは、今もなお、恐慌論入門には最適の文献のひとつであろう。

第4論文「窮乏化法則の問題点」は、絶対的窮乏化概念を「きわめて広い意味での『労働者の状態』」の悪化と規定し、窮乏化法則を『資本論』第1巻全体で取扱われている資本主義の本質的特徴から演繹されるところの必然的発展傾向」としてとらえ、あらゆる法則と同様にこの法則も反作用と修正を通じて実現されることを強調している。この論文は、周知のように、窮乏化論争史上の画期的論文のひとつである。第5論文「相対的窮乏化の問題によせて」、および労働そのものと疎外された労働との区別を論じた第6論文「労働と人間」は、第4論文の補論にあたるものである。

第7論文「現代資本主義社会と労働者階級」は、独占段階では、一方で窮乏化法則の作用が強まるが他方ではそれに対する労働者階級の抵抗も強まること、植民地的超過利潤も一定の役割を果すこと、さらに、生活水準の向上と生活様式の変化とが混同されるべきでないこと、を説いている。第8論文「現代資本主義と窮乏化説」では、現代資本主義のもとでの「労働者階級の状態」を消

費生活における「貧困」、生産活動における「労働苦」、それに「生活不安」および「精神面での状態」という4つの側面にわけ、それぞれがいかに悪化せざるをえないかを方法論的に論じている。

窮乏化法則の抽象的性格の強調から出発して現代資本主義のもとでの「労働者階級の状態」の具体的な悪化の理論的解明に努めたこれら一連の論文は、全体として1つの理論体系をなしている。だが、このような窮乏化論には異論もありうるであろう。私には、たとえば、窮乏化法則の独自の存在の論拠づけが弱いように思われる。岡氏のいうのは法則ではなくて法則性ではないのか。なぜなら、岡氏のいう窮乏化は『資本論』第1巻の経済諸法則の作用の総合的結果としての一定の発展傾向に他ならない。そして、周知のように、法則性は法則にくらべてより包括的かつ具体的な概念である。

いずれにせよ、社会主義経済論の専門家であった岡氏が同時に資本主義経済の基礎理論にもいかに強かったかを如実にしめているのが本書である。

『社会主義経済論の新展開』の第1論文「社会主義的所有についての一考察」では、所有範疇の経済的内容は生産関係の総体であること、分業が残る限りは全人民的所有も不平等を内包すること、社会主義と共産主義とでは全人民的所有の形態が異なること、国家的所有のもとで国家と企業とのあいだに一定の矛盾が存在すること、が説かれ、第2論文「社会主義のもとでの所有」では、周知の個体的所有再建論争に関連して、個人的所有と社会的所有の相互関連を正しく解決するためには社会主義と共産主義との区別および所有の法的形態と社会的内容の区別が必要であること、協同組合的所有は国家的所有にとってかわりえないこと、が説かれている。社会主義的所有の根本的諸問題が内外の研究の批判的検討をふまえて詳細に展開されており、私はその論旨のほとんどに賛成できる。ただし、社会主義的所有と共産主義的所有との区別だての論述(pp. 37~43)は、充分に説得的ではない。

第3論文「ソ連邦における賃金格差について」は、賃金格差を規定する具体的諸要因を分析している。第4論文「労働に応じた分配とブルジョア的権利」は、当該問題についてのマルクスとレーニンの見解を擁護しつつ、1960年に現われた陶铸および呉璉の周知の論文——そのような論調は現在の中国においても支配的である——を批判している。「労働に応じた分配」を扱った第5論文および第6論文は、労働の量に応じた分配でなく労働の量と質に応じた分配であることを、わが国の若干の論

者を批判しつつ主張している。労働に応じた分配についての岡氏の見解に、私は基本的に同意できる。

第7論文「社会主義経済と利潤」は、経済改革でクローズ・アップされた利潤概念について、社会主義のもとでは「階級所得としての利潤」はなくなるが、「価格と原価との残差余剰としての利潤」および「社会の純所得」としての利潤は残る、とする立場から、利潤概念・指標の重視を肯定的に評価している。第8論文「社会主義経済にかんする若干の新しい概念と接近方法について」は、社会主義諸国の「新経済制度」の特徴が、情報・利害・効率の3点に集約されることを鋭く論じている。第9論文「社会主義における計画と市場」は、計画的結合と市場的結合とは本質論的には「正反対」であるが、計画と市場とは機能的には同一機能をはたし、代替可能であり、相互補足的であること、そのさい市場は「正真正銘のもの」ではなくて「何らかの擬似性をもつ」ものであること、を主張している。これらの議論はすべて、ソ連および東欧のもっともラディカルな経済改革論者たちの主張に依拠しつつ展開されている。問題意識は鋭く、論点の整理は明快である。ただし、私は、利潤や市場の役割についての事実上手離しの肯定的評価には同意できない。社会主義のもとで利潤や市場は確かに資本主義的範疇そのものではないが、やはり「旧社会の母斑」的範疇である。また、本質論的接近と機能的接近とが、岡氏のいうように截然と区別しうるものかどうか、なおいっそうの検討を必要とするように思える。

第10論文「ソ連における計画経済の問題点」、第11論文「ソ連・東欧の経済改革と価格問題」、第12論文「ハンガリーの新経済制度」、第13論文「ソ連邦における資材・機械補給の改革をめぐる論争」は、ソ連・東欧における経済改革の進行のなかで提起されてくる個別的諸問題を論じている。総じて岡氏の立場は、より徹底した経済改革を要求する論者たちと同一であるが、たんなる紹介ではなく、完全に岡氏自身の主張となっている。

事実の丹念な調査、文献・見解の執拗な渉獵、論点の正確な摘出・整理、論旨の簡潔かつ論理的な展開、自己の見解の明確な主張、論戦にあたっての節度ある自制、などにみられる岡氏の学風に、これからは私は学んでいきたい。

【長 砂 實】